

小学校音楽科鑑賞授業における 子どもが教材と能動的に関わる授業づくり

—身体表現活動を用いて—

学籍番号 229343
氏名 山本 真路
主指導教員 藤本 佳子
副指導教員 兼平 佳枝

1. 研究の背景と目的

1.1 研究の背景

筆者は、これまでの教育実習の中で、「歌の授業は面白いけど、鑑賞は面白くない。」という子どもの声を多く耳にし、実際の様子からもあまり積極的な様子が見られなかったという経験がある。それには、鑑賞授業はどうしても聴くだけの受動的な授業になりがちだという点が挙げられる。歌唱のような表現領域と違って、子ども自身が音楽（教材）に能動的に関わることが少ないことが要因だと考えた。

さらに、学校実習では、身体を使って音楽を楽しむ様子が見られた一方で、音楽科固有の学力である知覚・感受についての発言が少ない、また、知覚のみの発言で止まるという子どもの様子も多く見られた。このことから、これまでの授業の中で、子どもが教材と能動的に関わる機会が少なかったのではないかと感じ、深く考える経験の少なさが実習校の課題の一つだと考えた。

そこで、鑑賞においても、子どもが能動的に音楽に関わる手段として身体表現活動を取り入れることが有効ではないかと考える。身体を使って音楽と関わり合うことは、音楽の要素により気づきやすくなったり、音楽に対するイメージをさらに膨らませたり、と深い学びにつながっていくこととなる。

1.2 研究の目的

本研究の目的は、小学校音楽科鑑賞において身体表現活動を取り入れた授業を行い、教材へ能動的に関わる手段として身体表現活動を取り入れることでどのような効果があったか明らかにすることである。そして、その効果を十分に引き出すためにどのような活動の手立てや教師の働きがポイントになるかを考察することである。

2. 研究の方法と授業分析の概要

まず、辞典や先行研究に基づき、本研究における「身体表現」について「音や音楽から知覚・感受したことを身体を媒体として表現する活動」と定義した。次に、小学校音楽科鑑賞において身体表現活動を取り入れた授業の計画・実践・分析を行った。授業分析の視点は、知覚・感受の様相はどのように変容しているかと設定した。逐語記録に加え、授業の映像を観察し、推定される動きの根拠と推定される理由を示して、分析を行った。

3. 結論と考察

3.1 結論

研究の結果、身体表現活動は教材へ能動的に関わる手段として有効であり、身体表現活動を取り入れる効果として、(1) 知覚・感受したことが、何度も新しく作り変えられ、より豊かになっていく。(2) 知覚・感受したことを、身体の動きを通して伝え合い、協働的に教材と関わるができる。という2点が明らかとなった。

3.2 考察

授業分析を行うことを通して、身体表現活動が、子どもの知覚・感受の変容に大きく関わっていることが分かった。また、身体の動きでコミュニケーションをとり、さらに教材と深く関わる様子がみられた。このことから、身体表現活動を用いて授業を行う際のポイントとして、①子どもが音楽を何度も聞いて身体の動きをつくることのできるような場面を設定し十分な時間をとること、②他の子どもと交流できるような環境の設定、③音楽の要素を自然と知覚できるような基本形の動きを取り入れること、④話し合いが進むような教師の声かけの4点が考えられる。

4. 今後の課題

今回の実践では、子どもが音楽の要素やイメージについてしっかりと発言している場面が少なく、分析が推察でとどまってしまったところが多い。身体の動きは、言葉では表現できないものを表現している場合もあるため、全てを言語化するのは難しいが、音楽の学習、特に批評文作成を行う鑑賞授業では、知覚・感受を言語化して意識することはとても重要である。そのため、経験・分析ステップの段階で、身体の動きの根拠となる知覚・感受について言語化し、音に返しながら確認・共有する場面が必要であると考えた。また、子ども自身がより言語化して要素やイメージを伝えられるように、普段の授業から知覚・感受を言語化して共有する経験が必要だと考えた。今後は、現場での実践の中で、言語化できない子どもの知覚・感受を読み取り、言語化して共有することを意識していきたい。